

回想と交流——浙江美術学院国画系書法篆刻班留学の回想および

中国美術学院書法系と大東文化大学書道学科との国際交流

河内利治（君平）

1 序

このたび、中国美術学院書法系から、「慶祝中国美術学院書法專業成立四十周年暨国際高等書法教育論壇活動特邀请函」を頂戴し、中国美術学院書法專業に対し衷心からお祝いを申し上げたいと思います。

筆者は、今井凌雪先生（書法専門）と牛島徳次先生（中国語能力）の推薦文を頂戴し、当時の日本文部省（現文部科学省）学術国際局ユネスコ国際部の中国留学生試験に合格し、一九八一年九月から一九八三年八月まで、中国政府奨学金普通進修生として、浙江美術学院国画系書法篆刻班に留学しました。その間、正規の授業科目として、〈書法史論〉・〈文字学〉および〈書法（実習）〉を沙孟海先生に、〈篆刻（実習）〉と〈印章史論〉を劉江先生に、〈書法理論〉を章祖安先生に、〈中国美術史〉を王伯敏先生に、〈花鳥画〉を盧坤峰先生に、〈山水画〉を姚耕雲先生に学びました。さらに、ちょうど大学院を修了したばかりの、朱関田、王冬齡、邱振中、祝遂之、陳振濂の五先生からも様々な形で指導を賜りました。またこれらの留学生用の授業とは別に、中国人用の平常授業〈中国文学〉や、多くの特別講義も受講しました。

生活面では、特に外事弁公室の宋学善先生にお世話になりました。このほか、国画系の書法篆刻班以外の山水画班や人物画班の先生方および院生や本科生、国画系以外の多くの方々にもお世話になりました。

よって、浙江美術学院の草創期の外国人留学生として、当時の教学情況ならびに活動について回憶する絶好の機会であり、かつ責務であると考え、「論壇主題」の中の「各種記念回憶性文章」として本稿を執筆することにします。

さらに、近年および未来の大東文化大学との国際交流について付言しておきます。

2 正規授業科目

筆者は、筑波大学芸術専門学群美術専攻（書主専攻）4年生に在籍したまま留学しましたので、浙江美術学院で取得し

た単位を、筑波大学の単位に読み替える、すなわち単位の互換を行う必要がありました。（この件については、当時筑波大学教授であり、大東文化大学元教授でもある村上翠亭先生に大変お世話になりました。）留学してから、まず劉江先生と相談して、正規の開設授業科目を決定しました。

当時は、浙江美術学院が外国人留学生を受け入れ始めた2年目で、留学生への教学体制が十分に整ってはいない状況だったと思います。そのような時期に、劉江先生は熱心に筆者のために開設授業を考えて下さいました。たった一人の留学生のために、単位認定のカリキュラムを設置するということは、今考えてみても、なかなかできないことでしょうし、非常に有りがたく、光栄に感じています。

一九八一年度の外国人留学生は8人でした。本科生の塔尼亞（パキスタン・女性）、進修生の薩梅恩（パキスタン・女性）、董昭安（カナダ・女性）、中野遵（日本・男性）の4人の1期生が2年目を迎え、劉重華（オーストラリア・女性）、李愿玲（アメリカ・女性）、雷吉娜（ドイツ・女性）と筆者の4人が2期生という構成でした（注1）。まったく女性上位の社会でしたが、留学生の中では、英語が公用語になっており、中国語のみならず英語も聞きかじりで少し勉強できたことは、望外の喜びでした。

書法篆刻班は、中国人の本科生がおらず、日本人留学生のみでしたが、一九八二年度には中国各地から集まった進修生が5人いました。

筆者が受講した正規の授業科目は、次の表の通りです。（注2）

筆者は、左記のような授業を受けましたが、幾つかの授業について、先生ごとに、受講ノートから授業内容を含めて回想しておきたいと思います。

2-1 沙孟海先生

沙孟海先生からは、《書法史論》と《古文字学》を学びました。毎週水曜日に、沙孟海先生のご自宅に伺い、午前中二時間の講義を受講しました。一年目は、中野遵さんと二人で授業を受け、後期からは市川英子さんも一緒に受講しました。二年目は、沙孟海先生が体調を崩されたため、休講もありましたが、先生は最後まで授業を行って下さいました。沙孟海先生の留学生に対する講義を一番長く受講したのは、恐らく筆者でしょう。講義ノートをもとに数えると、通算四十五回も授業を受けたことになります。なお詳細については、別に「恩師沙孟海先生筆《逸録倪會鼎手跋一段》」を書きましたのでご参照下さい（注3）。

授業科目名	履修	年次	教授名	注
書法（実習）	必	1・2	沙孟海他全教員	自習
篆刻（実習）	必	1・2	劉江	実習と講義
書法史論	必	1・2	沙孟海	講義
中国美術史	必	1	王伯敏	講義・試験
画論・文学選読	選	1・2	章祖安	隔週講義
花鳥画（実習）	選	1	盧坤峰	いずれか一つを選択し 二年間学習可能
山水画（実習）	選	2	姚耕雲	
表装・拓本	選	1	西湖芸苑王師傅	隔週実習
中国文学	選	1		中国人用授業
実習・参観	選	1・2	沙孟海他全教員	卒業制作と学外研修
論文	選	2	沙孟海	卒業論文

〈実習・参観〉授業として、沙孟海先生が浙江省博物館での鑑賞授業を行って下さいました。その時に鑑賞した黄道周の楷書と行草書がきっかけで、〈卒業論文〉として、《黄道周的書法観》を中国語で書き上げて沙孟海先生に提出し、丹念なご批評を賜りました。帰国後、沙孟海先生にご批評頂いた点を訂正して全文を翻訳し、筑波大学卒業論文「黄道周序説」として提出しました。

〈書法（実習）〉の授業では、一年目は主として《張猛龍碑》と《孫過庭書譜》を臨書し、この二作品の臨書指導を受けました。二年目は自由に制作し、時折先生に指導を仰ぐと言うやりかたでした。作品の成果は、一九八三年七月、〈留学修了作品展〉——《中華人民共和国浙江美术学院外国留学生・書法・山水・人物進修作品匯報展》としてまとめました。この展覧会は、浙江美术学院陳列館において開催されたもので、筆者は合計22点を出品しました。修了式典も併せて開催して下さり、王徳威副院長、沙孟海先生をはじめ、多くの恩師が列席して下さいました。

2-2 劉江先生

劉江先生からは、〈篆刻（実習）〉と〈印学史論〉の講義を二年間学びました。金曜日の午前中一杯、厳しい授業がありました。毎週2顆を模刻するという宿題があり、似ていないところを指摘くださり、何度でも刻し直すというやり方でした。一年目は漢印を、二年目の前期は古璽と明清印人の模刻をしました。二年間で百顆は刻したと思います。二年目の後期は、創作も行い、留学修了作品展として取り組みました。テーマは筆者が中国国内旅行で訪れた名所旧跡でした。二年目の前半期は実習が終ると、〈印章史論〉の講義を行って下さいました。その日時、内容は次の通りです。

- ① 一九八二年九月二十四日「印章的起源」
- ② 一九八二年十月八日「春秋戰国的社会狀況与印章情況」
- ③ 一九八二年十月十五日「春秋戰国的印章芸術上的特点与評價」
- ④ 一九八二年十一月五日「秦代社会狀況与印章芸術」
- ⑤ 一九八二年十一月十二日「漢代社会狀況与印章芸術（1）」
- ⑥ 一九八二年十一月十九日「漢代社会狀況与印章芸術（2）」
- ⑦ 一九八二年十一月二十六日「魏晋南北朝時代与印章」
- ⑧ 一九八二年十二月七日「隋唐時代与印章芸術」
- ⑨ 一九八二年十二月十七日「五代、兩宋、遼金時代与印章芸術」

- ⑩ 一九八二年十二月二十四日「元代社会状況与印章芸術」
 - ⑪ 一九八三年一月七日「明代社会状況与印章芸術」
 - ⑫ 一九八三年一月十五日「明代印章流派」
 - ⑬ 一九八三年一月二十一日「清代社会状況与印章芸術」
 - ⑭ 一九八三年一月二十五日「清代印章流派」
- 特に印象深いのは、一九八二年一月、北京展覽館で開催された《中華人民共和国全国大学書法展》に参加するように先生に勧められ、「隸書莊子齊物論」を出品したところ、「特別奨」を受賞したことです。中国で作品が受賞するとは思いませんでした。

2-3 章祖安先生

章祖安先生からは、主として《書法理論》と《現代漢語》を学びました。《書法理論―文字学》の授業は、一九八二年九月九日、十六日、二十三日、二十八日と4回行われ、最後は「古代漢語常識」として講じられました。また十二月九日は、「陸維釗先生的思想指導等等」と題する講義も受講しました。《現代漢語》の方は、先生のお時間のある夜に、ご自宅にお邪魔して、中文作文の指導を賜りました。これは言わば課外授業で、先生は半年間、厳格にそれも無償で指導して下さいました。古代漢語を学ぶためには、現代漢語の語法を習得することが必須であるという観点からはじめたもので、北京語言学院編《基礎漢語課本第四冊》第五十九課から第七十三課の練習問題を予習し、先生に修改して頂きながら、現代漢語の語法を指導してもらいました。

2-4 王伯敏先生

王伯敏先生からは、《中国美術史》の中の中国絵画史を学びました。先生が話される中国語が難解のため、よく板書して教えて下さいました。また、講義に関連した内容をテーマを選び、四百字にまとめてレポートを提出するという宿題があり、毎回丁寧に添削してから返却して下さいました。それは以下のようなテーマです。

- ① 一九八一年十月十四日「上海博物館參觀記録」
- ② 一九八一年十月二十一日「関于長沙馬王堆漢墓」
- ③ 一九八一年十一月四日「長沙馬王堆一号漢墓」

- ④ 一九八一年十一月十一日「木簡、竹簡和它的美術性」
- ⑤ 一九八一年十一月十八日「新出土文物和它的意義」
- ⑥ 一九八一年十一月二十五日「從現在起的書法」
- ⑦ 一九八一年十二月二日「謝赫《古画品録》——六法——」
- ⑧ 一九八一年十二月八日「敦煌莫高窟」
- ⑨ 一九八一年十二月十六日「空間的重要性」
- ⑩ 一九八一年十二月二十三日「宋代美術」

先生のご自宅に何度もお邪魔し、収蔵美術品を見せて下さり、画を画いて下さいました。先生は美術史論家とっていましたが、実作に裏付けられた理論であることに驚きを覚えました。後年、先生の著書《中国画的構図》天津美術出版社一九八一年版を翻訳し、一九八五年十月に雄山閣出版社から『中国画の基礎構図』として出版しましたが、実作と理論の關係を見事に述べられたものだと思います。

2-5 盧坤峰先生と姚耕雲先生

盧坤峰先生から《花鳥画》を二年間学び、姚耕雲先生から《山水画》を数回学びました。この授業は「輔導課」であり、カリキュラム上、一年目に花鳥画を、二年目に山水画を学ぶ予定でしたが、山水画は筆者にとって格別に難しく、盧先生と姚先生の両方の了解を頂いて、花鳥画を中心に学ばせてもらいました。盧先生は山東方言が強い方ですが、画筆を執ると、まるで神業の如く、筆者の拙劣な画面が、あつという間に見事に変貌するのに感動しました。時には、「似是而非」、「遺貌取神」というようテーマで講義もされました。何とか「墨竹画」だけは及第点をもらえたので、今も時折画いています。

花鳥画班では、盧先生以外に、徐家昌先生にも教えて頂きました。また、山水画班では、姚先生のほかに、陸儼少先生、孔仲起先生、董中燾先生からお話を聞く機会があり光栄でした。

2-6 朱関田、王冬齡、祝遂之、陳振濂の四先生

四人の先生がリレー形式で《中国書法通史》と《書法理論》の講義を担当されました。その担当者、日時、分担内容は次の通りです。

①祝遂之：一九八二年九月七日「殷代：甲骨文、金文」、九月十四日「周代書法」、

十月十五日「春秋戰国時代」、十月十九日「石鼓文」

②王冬齡：一九八二年十一月九日「西漢書法」、十一月十一日「東漢書法」

③朱関田：一九八二年十一月二十五日「隋唐時代」、十二月二日「書法理論」

④陳振濂：一九八二年十二月十日「五代、北宋書法」、十二月十六日「南宋、元代書法」、

十二月二十一日「对趙孟頫的評價爭論、宋代帖学史、宋代金石学史、宋代書論」

⑤王冬齡：一九八二年十二月二十八日「明代書法与書法理論」、

一九八三年一月十三日「清代書法与書法理論」

この四人の先生方とは、「師兄弟」の關係のご縁で、今日まで親しく交友しています。これは留学したお蔭だと感謝しています。

2-7 邱振中先生

上記の四人のほか、もう一人の大学院修了の邱振中先生からは、〈書法美学〉を学びました。一九八二年十一月二日「概況与書法芸術形質」、十一月四日「書法学—素質与修養」、十一月六日「書法芸術的形式問題」を学びました。また彼の修士論文「関于筆法變遷的若干問題」を翻訳し、《新書鑑》に三回に分けて連載させていただきました。邱先生とも、「師兄弟」の關係で今日まで親しく交友しています。これも留学のお蔭です。

2-8 西湖芸苑王師傳

一九八一年度に〈表装〉の実習授業を受けました。初めの数回は教室で講義を受け、その後、隣接する「西湖芸苑」で実習授業を受けました。裏打ちされた浙美の先生方の作品が、陳列場所狭しと並んでいたのが印象的です。〈拓本〉の授業は結局開講されませんでした。

3 特別講義

受講した特別講義を、講義ノートから時間順に列記しておきます。(注4)

陸抑非先生：一九八二年十月十四日「書法心得」(注5)

啓 功先生：一九八二年十一月一日、二日「石刻与摸迹的關係」

陸儼少先生：一九八二年十二月三日「筆力、筆氣、行勢（題跋）」

尉天池先生：一九八二年十二月五日「書法教育方面的問題」

范景中先生：一九八三年四月二十三日「对于詩歌（中国、日本）以及画面的西洋的影響」

この他にも、諸涵先生、孔仲起先生、董中壽先生等、何人もの先生の特別講義が開催されました。できるだけノートを取ったつもりですが、上記以外は散逸してしまいました。今思うと非常に残念です。

4 学外研修

一九八二年五月初旬、西安と洛陽に研修に出かけました。引率教員は陳振濂先生と宋学善先生でした。西安では、大雁塔、清真大寺、鼓樓、秦始皇帝兵馬俑博物館、華清池、驪山、半坡村博物館、昭陵墓博物館、咸陽博物館、陝西省博物館（碑林）、乾陵、茂陵、永泰公主墓、章懷太子墓、懿德太子墓を見学し、陝西師範大学書法研究会との交流会もありました。初めての揮毫体験をさせて頂き、実力の無さを痛感したものです。洛陽では、閔林、白馬寺、老城、少林寺、嵩陽書院、中岳廟、龍門石窟を参観しました。この研修旅行については、《新書鑑》に報告文を載せるため、特別に座談会を現地で開催して頂き、非常に実りある研修旅行でした。

そのほか、山水画班が黄山へ写生に行くのに同行させてもらい、黄山雲海を楽しませてもらった研修旅行や、上海博物館の参観といった研修旅行もありました。

5 中国政府による国内旅行

当時、中国政府奨学金を受給する学生は、一年度に1回、寒暇に中国国内旅行がプレゼントされるといふ恩典がありました。一年目は南昌と廬山への旅でした。二年目は、武夷山を越え、福州、泉州、漳州、廈門と回りました。この2回の旅は、当時の中国事情を知る上で非常に良い体験でした。

特に二年目は、筆者と顧玉真（オーストラリア人・女性）に、加えて引率の宋学善先生というわずか三人の旅のため、全く自由な気分の旅行でした。経費節約のために、先生と私は同室で過ごしましたが、ある朝、先生が「君は昨晚寝言で奮闘していたよ」と言われ、寝言を中国語で言えるようになって立派だ、と褒めてくれたことは、忘れがたい思い出です。

6 良師益友

その宋学善先生は、筆者にとって、現代中国語の学習指導を課外授業で行って下さった真の中国語の先生です。留学当初、中国語の実力が不足していたため、学内で中国語の輔導授業を開講してもらえよう頼みましたが、浙江美術学院ではそのような授業は開講しないとのことでした。そこで、宋先生にお願いしたところ、快く中国語の輔導を引き受けて下さいました。毎日正午の浙江広播電視台の放送を録音し、「聴写」した文章を先生に修改して頂くと言うやり方で、一九八一年十月十三日から一九八二年三月十一日まで続けました。その半年間、無償で献身的に指導して下さいました先生のご恩は、絶対忘れられません。先生には生活面で特別にお世話になりました。一々挙げられないほど恩義がいっぱいあります。その他、授業以外の場でも多くの知人を得ました。日本南画院との交流で面識を得た葉尚青先生、太極拳と太極剣を教えてくださった王先生、卒業論文の手助けをして下さった史論系大学院修了の范景中氏、「湖筆」の翻訳を通じて親しくなった宋建明氏、国画系大学院の卓鶴君、谷文達、佟振国、彫彫系本科生の韋天瑜、人物班本科生の蔣進、鄭重賓、金松、花鳥画班本科生の蘇衛嬰等の同学とも交友があり、勉強面のみならず生活面でもいろいろと助けてもらいました。一つだけ、生活面で忘れられない出来事を挙げておきます。筆者二十四歳の誕生会を、留学生樓の教室を借りて、王冬齡、陳振濂先生をはじめ、同学たちが開催して下さいましたことです。中国人と外国人がこんなにも親しく交友できるのかと、酔いしれた一晚でした。

7 留学後から今日まで

留学後、筆者は何度も杭州を訪れています。その間の、恩師知人との再会を、時間順に記しておきます。一九八三年、筆者は留学を終えて帰国しましたが、「西泠印社八十周年」記念大会に参加するため、すぐさま杭州を再訪しました。この時に見聞した内容は、「西泠印社八十周年記念大会印象記」として、北川博邦主幹《篆刻》4号（東京堂出版、一九八四年一月発行）に報告文を書きました。

一九八六年三月二十七日から三十日まで、母親を伴って、浙江美術学院を表敬訪問したことがあります。入院中の沙孟海先生をお見舞いし、朱関田先生に大変お世話になったことは忘れられません。またこの時は、筆者が留学中にお世話になった先生方が挙って宴会を開いて下さり、そのご厚情に涙が止まりませんでした。

一九八八年十一月六日から十一日まで、浙江省博物館文瀾閣において開催された「日本雪心会書法展覧」に参加するため、杭州を再訪し、沙孟海先生をはじめ恩師の先生方に再会できました。この展覧会では、沙孟海先生筆「日本雪心会書

法展覧」の看板が立てられ、その書の迫力に見入ったことが鮮明に思い出されます。同展については、「日本雪心会書法展覧」と題して《新書鑑》一九八九年一月号に報告文を書きました（池田利広氏と共著）。

一九九二年十月十日、沙孟海先生の訃報に接し、哀悼の意を表明するために、「敬悼沙孟海先生」詩・「寒風聞訃不堪悲、欲報師恩未有為。当代盛名埋硯海、西泠翰墨有誰支。」を捧げました。筆者にとって、悲痛の極みの一日でした。

一九九五年十一月、王冬齡先生から連絡があり、浙江省書法家協会・中国人民対外友好協会・中国書法家協会後援中国美術学院主催《首届国際現代書法双年展》に、招待作家として「篆書道卓遠而日忘兮」を出品したことがあります。

一九九六年三月、前々勤務校の調布学園女子短期大学の学生を引率し、杭州を観光旅行した時、浙江美術学院を訪問し、先生方との再会を喜び合いました。

一九九六年十月、朱関田先生から連絡があり、中国広東省広州市・中国書法家協会主催「康有為国際書学研討会」において、〈康有為的書品論—關於評論用語〈骨〉的探討（概要）〉を発表したことがあります。この時は杭州を訪れませんでした。朱先生を初め、旧交を温めました。

二〇〇〇年七月と二〇〇一年九月に、「大東文化大学と中国美術学院との中国短期研修に関する覚書」を締結するために、中国美術学院を訪問し、両校の教学上の真の友好関係を築いてきました。特に二〇〇一年に訪問した時は、書法系が四月に創設されたこともあって、スムーズに協議が進みました。中国側が任道斌教授、祝遂之教授および蔣進副教授、日本側が田中裕昭教授（書道学科主任）と筆者で、覚書の内容を決定しました。言うまでも無く、劉江、章祖安両先生には、事前にご了解を得てのものでした。

8 未来に向けて—大東文化大学と中国美術学院との国際交流

上記の覚書により、二〇〇二年九月一日から十四日までの二週間、中国美術学院国際培訓中心（INTERNATIONAL ART CENTER INN）で、大東文化大学書道学科3年生21名の学生が、筆者の授業「書道文化演習（海外）」の一貫として、「書画短期研修」を行いました（引率教員は河野隆講師と筆者、注6）。

そもそも「書道文化演習（海外）」は、前期に大東文化大学の授業として現地研修のための事前学習を行い、各自テーマを決めて事前レポートを提出し、それを「事前課題集」として冊子に編集して持参し、講義、実技、参観、調査、交流等の2週間約六十時間の海外研修（後期授業時数に相当）を踏まえ、帰国後にレポートを再提出するという新しい学習プログラムです。近い将来、国際的に活躍する真の書家・研究者を育成することをねらいとするものです。

九月一日、夜半に杭州に到着すると、芸苑賓館門上の横断幕「歓迎日本大東文化大学師生到中国美院交流学习」が出迎えてくれました。以下に、簡単に研修日程と内容を紹介しておきます。

1日 成田→MU524→上海（陳大中副教授出迎え）→中国美术学院手配バス→杭州。

2日 歓迎会、「杭州碑林」「中国印学博物館」「西泠印社」「浙江省博物館」「西湖美術館」《錢君匋收藏品清朝名品展》
参観。

3日 任道斌教授「文房四宝」講義、「潘天寿紀念館」参観。

4日 王冬齡教授「楷書」実技。

5日 陳大中副教授「隸書」実技。

6日 沈浩講師「篆書」実技。

7日 祝遂之教授「行書」実技。

8日 沈楽平講師「篆刻」実技。

9日 中国美术学院書法系2年生7名と学習交流会（揮毫会）、「西湖美術館」《諸楽三展》、「胡慶余堂（中薬博物館）」
「胡雪岩故居」参観。

10日 「蘭亭」・紹興「魯迅故居」「魯迅紀念館」「三味書屋」「青藤書屋」参観、蕭山区「中国美述学院仮校舎」見学、
「六和塔」と錢塘江の逆流見学。

11日 蔣進副教授「花鳥画」実技、「靈隱寺」「西湖遊覧」《三潭印月》、「杭州動物園」見学、浙江友誼商店「龍井茶」購入。

12日 蔣進副教授「花鳥画」実技、「結業典礼（終業式）」宋建明副院長・章祖安教授・宋学善先生特別出席。

13日 杭州→中国美术学院手配バス→上海。陳大中副教授・沈楽平講師同行。「上海博物館」見学、「友誼商店」買物、
「外灘」自由散策。

14日 上海→MU523→成田。

学内授業はすべて芸苑賓館三樓の「多功能力（多目的室）」で実施されました。学生全員に筆紙硯墨、毛氈、筆洗、顏料が用意され、座席固定、空調機配備の恵まれた環境でした。スライド使用の講義後、持参の多くの貴重な硯を直接触らせていただいた「文房四宝」を除き、6科目7日間の実技授業（楷行篆隸印画）は、先生の講義（通訳を含め三十分から六十分）の後、「示範（範書）」、「功課（宿題）」指示、「修改（添削）」、「総括」（全体百二十分強）の流れで、朝八時半から

ら午前中を費やして進められました。午後と夜は基本的に「自習」時間で、宿題を仕上げる者、「杭州書画社」や「新華書店」で書籍を購入する者、「邵芝巖筆莊」、「夜市（夜店）」、「百貨商店」、「便利商店（コンビニ）」で好物を購入する者、レポート課題の資料収集に回る者と自由に過ごしました。宿題は、中国人の先生が百点法で成績を評価してすぐに返却するという教学法を採り、全員熱心に取り組みました。宿泊地の賓館は2星クラスのホテルながら快適で、男子学生7名の多くが下痢症状になったものの、食事は三食とも好評でした。連日三十度を越える猛暑の中、大きく体調を崩すものも無く、総じて「円満成功」の成果を収めたと言えます。学生各自の成果はひとえに中国美術学院外事処（任教授と王穎穎女史）と書法系専任教員の献身的な支持、協力によるものであります。

筆者は、このプログラムが成功した思いを、「題於芸苑樓」と題して、「恍如隔世廿年秋、求学大東海外舟。芸苑菊花何日発、有縁美院再從游。」という詩に託し、「結業典札」の時に披露しました。筆者自身が二十年前に留学した学府で、教え子がまた学ぶことができ、将来、筆者のような長期留學生が登場するであろうと言う喜びを詠ったつもりです。

9 結び

今年は、筆者が浙江美術学院での留学から帰国して、ちょうど二十年目に当ります。この間、沙孟海先生はお亡くなりになりましたが、他の先生方は皆さんご健在で活躍されており、筆者にとって、これほど心強いことはありません。

この二十年間、筆者が書法を専門に研究し続けて来られたのも、浙江美術学院に留学したことが、最大の契機だと考えます。浙美は研究の出発点であると言っても過言ではありません。文末に、附録「浙江美術学院および留学関連の河内利治執筆文章と作品」を記しましたが、如何に関連文章を執筆してきたかがお分かり頂けると思います。

現在、中国美術学院書法系は、新しい歴史の一步を踏み出したばかりです。前途洋洋として、益々大きく発展していくことでしょう。しかし、浙江美術学院時代の立派な先生方の努力と辛苦が無ければ、今日の書法系が存在しえないことを忘れてはならないと思います。元留學生の身分で、このようなことを申し上げるのは非常に僭越だとは思いますが、筆者にとって、浙江美術学院は第二の母校であり、杭州は第二の故郷であると考えています。どうか、元留學生のこのような切なる気持を汲み取って頂き、日中両国の大学院・大学書法教育のためにより一層貢献されますことを願っております。

(注)

1 中国美術学院出版社一九九八年発行《中国美術学院七十年華》「附録・中国美術学院歴屆學生名録」を参照。

- 2 河内「中国書法留学記——第陸回《開設授業科目》」（芸術新聞社《墨》第六〇号、一九八六年五月）を参照。
- 3 河内「緬懷導師沙孟海」（西泠印社編『百年名社・千秋印学』国際印学研討会論文集』西泠印社出版発行 P.395—P.400 所収）および「恩師沙孟海先生筆《逸録倪會鼎手跋一段》」（大東文化大学編『大東文化大学紀要〈人文科学〉42』）を参照。
- 4 浙江美術学院とは別の機会（雪心会訪中団）で、楊仁愷先生から一九八二年八月八日に「遼寧省博物館蔵品」について講義を賜ったこともあります。
- 5 この陸先生の講義題目は、河内の講義ノートより命名したことをお断りしておきます。
- 6 河内「大東の書——書道文化演習（海外）」（大東文化大学書道研究所発行《大東書道》二〇〇二年十一月号所収）。なお、この海外演習については、河野隆先生の貴重な報告文「書道文化演習2（海外）」——《西湖芸苑札記》（大東文化大学書道学会編『大東書学3』二〇〇三年三月発行所収）を参照されたい。

附録【浙江美術学院および留学関連の河内執筆文章と作品】

授業体験、留学活動、学術文章の翻訳などを、出版物の内容上から分類し記載しておきます。

A 中国出版物

- 1 西泠印社編輯部「西泠藝叢8」一九八三年十二月所収
文章「我的留学会」、草書《魯迅先生詩》、篆刻朱文《翰墨》《無心》《如雲烟》

- 2 杭州市美協・篆刻研究会「杭州篆刻5」一九八三年十一月所収 篆刻朱文《目送歸鴻難》

B 芸術新聞社《墨》第五五号〜第六〇号連載「中国書法留学記」

- 1 「第壹回《中国留学制度》：受け入れ先は浙江美術学院」一九八五年七月第五五号二二七頁
- 2 「第貳回《浙江美術学院：その沿革と歴史》」一九八五年九月第五六号二二二頁
- 3 「第參回《留学生生活漫談（一）：室内雨漏り事件》」一九八五年十一月第五七号二一九頁
- 4 「第肆回《留学生生活漫談（二）：学内食事編——米の虫・腹の虫》」一九八六年一月第五八号二五一頁
- 5 「第伍回《留学生生活漫談（三）：健康管理編——集団肝炎の恐怖》」一九八六年三月第五九号二二七頁
- 6 「第陸回《開設授業科目・授業内容あれこれ》」一九八六年五月第六〇号二二九頁

C 今井凌雪主幹《新書鑑》誌第78号〜第102号連載「杭州だより」

- 1 浙江美術学院について 一九八一年十一月《新書鑑》78
 - 2 寧波・紹興へ 一九八二年二月《新書鑑》80
 - 3 寒假旅行記〈南昌・廬山・桂林・昆明・長沙〉 一九八二年四月《新書鑑》82
 - 4 参観授業報告記 一九八二年六月《新書鑑》84
 - 5 夏假旅行記〈西域・内蒙古・山西・河南コース〉
— 絲綢之路の旅—西域めぐりして・烏魯木齊・吐魯番・敦煌・蘭州 一九八二年十一月《新書鑑》88
 - 6 夏假旅行記〈西域・内蒙古・山西・河南コース〉
— 蒙古高原の旅—呼和浩特と大草原 一九八二年十二月《新書鑑》89
 - 7 夏假旅行記〈西域・内蒙古・山西・河南コース〉
— 江蘇の旅—揚州・南京—四川の旅—成都・樂山・重慶 一九八三年三月《新書鑑》92
 - 8 夏假旅行記〈西域・内蒙古・山西・河南コース〉
— 揚子江・湖南の旅—長江下り 一九八三年四月《新書鑑》93
 - 9 中国語雜感—中国語の複雑さと普通話の必要性— 一九八三年五月《新書鑑》94
 - 10 寒假旅行記—福建省・広東省の旅—武夷山・福州・泉州 一九八三年六月《新書鑑》95
 - 11 寒假旅行記(続)—福建省・広東省の旅—漳州・厦門・広州・海南島 一九八三年七月《新書鑑》96
 - 12 学外研修旅行記(1)—西安・洛陽・開封 一九八三年八月《新書鑑》97
 - 13 学外研修旅行記(2)—西安・洛陽・開封 一九八三年九月《新書鑑》98
 - 14 学外研修旅行記(3)—西安・洛陽・開封 一九八三年十月《新書鑑》99
 - 15 帰国旅行記—香港・澳門・台湾—〈香港〉・〈澳門〉 一九八三年十二月《新書鑑》101
 - 16 帰国旅行記—香港・澳門・台湾—〈台湾〉 一九八四年一月《新書鑑》102
- D 今井凌雪主幹《新書鑑》誌収載翻訳原稿等
- 1 邱振中「筆法変遷に関する若干問題」 一九八三年一〜三月《新書鑑》90〜92
河内「(付) 邱振中氏の論文及び為人について」
 - 2 沙孟海「両晋・南北朝・隋代の書法略論」 一九八三年十一月《新書鑑》100

- 3 劉江「中国の書法教育について—浙江美術学院・書法專攻学科を中心に」
一九八八年十月・十二月《新書鑑》159・161
- 4 章祖安「材に因りて教えを施す」
一九九〇年九月《新書鑑》182
- 河内「章祖安先生の人となり」
- 5 陳振濂「三大印象簡述」
一九九一年十月《新書鑑》195
- 河内「陳振濂先生の人となり—“陳振濂旋風”と研究成果」
- 6 劉江「古人を尊重し、自己を尊重す」
一九九二年九月《新書鑑》206
- 河内「劉江先生の人となり—“中国書法教育界の重鎮”」
- 7 祝遂之「先には難きも後には獲ん」
一九九三年十月《新書鑑》219
- 河内「祝遂之先生の人となり—“中国書法篆刻界の気鋭”」
- 8 祝遂之「石刻の刻者の問題について—沙孟海先生の〈碑版刻手問題〉からの考察」一九九四年四月《新書鑑》225
- 9 邱振中「来日して考える一編の全書法史—(雪心会展)(雪心会選抜書作展) 參觀隨想錄」
一九九五年十一月《新書鑑》244
- 10 河内「中国のシシユフォス(上)—邱振中先生の書法理論と書法芸術」
一九九五年十二月《新書鑑》245
- 11 河内「中国のシシユフォス(下)—邱振中先生の人となりについて」
一九九六年一月《新書鑑》246
- E 大学紀要に収載した翻訳
- 1 書法美学ノート(1) 邱振中氏の「感覚の叙述—古代書論中の言語現象をめぐる研究」(上)
調布学園女子短期大学日本語日本文化学科編「調布日本文化5」P.(119)―P.(133) 一九九五年三月
- 2 書法美学ノート(2) 邱振中氏の「感覚の叙述—古代書論中の言語現象をめぐる研究」(下)
調布学園女子短期大学日本語日本文化学科編「調布日本文化6」P.(1)―P.(16) 一九九六年三月